

新任のご挨拶

外科 東 尚（平成 30 年 4 月）

平成 30 年 4 月、病院長として着任いたしました。私の専門は一般外科、主に消化器外科です。これまで多職種によるチーム医療や災害医療などにも取り組んできました。

長崎記念病院は、4つの病床機能（一般、回復期リハ、療養、介護）を有し、長崎市南部地域密着型の病院です。社会医療法人として、地域の救急医療、小児救急の責務も担っています。また、医療資源の偏在が叫ばれるなか、長崎大学とも協力して地域ならではの医療人育成を開始しています。

さて、私は「医療従事者が元気でなければ患者さんは元気になれない」と考えています。医療現場を支える職員のモチベーションを維持できる環境作りを行い、病院が一つのチームとなって患者様、地域の皆様を元気に出来るように尽力してまいります。

病院長としては甚だ未熟ではありますが、皆様のご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

内科 山口耕一（平成 30 年 4 月）

「私の専門は、腎臓内科です。現在、成人の 8 人に 1 人といわれる新たな国民病「慢性腎臓病(C.K.D.)」対策が全国的に取り組まれており、長崎南部地域においても微力ながらお役に立ちたいと思っております。慢性腎臓病は透析が必要となる可能性があると共に、心疾患にも関連しており、軽視できない疾患です。私は、これまで長年にわたり腎疾患の治療はもちろんですが、血液浄化療法（透析や血漿交換など）にも携わってきました。その上で、検尿による早期発見から腎機能障害に対する治療を栄養士による栄養指導などを含めたチーム医療として御提供させていただきながら、患者様と一体となれる医療を目指したいと願っています。」

内科 小笠原貞信（平成 30 年 4 月）

2018 年から着任した内科の小笠原です。私は長崎市出身ですが、約 20 年間長崎を離れた時期がありました。この間に日本はバブル景気ははじけ、世界に先じて超高齢化社会となり、私が戻ってきたとき長崎市は周辺を合併して拡大していたにも関わらず、人口は減少していました。長崎市北部で育った私は、これまで南部地域に疎かったのですが、それでも昭和の頃と比べて国道や環状線など整備されたという変化はわかりました。

さて私は主に「訪問診療」を担当しています。病状などの理由で通院困難な患者さんのために、自宅に出向いて診療する制度です。周囲の医院・クリニックの先生方と協同・分担しながら行っており、私は最も南端の野母崎地区が中心です。ときに夜中に駆け付ける場合もあります。そのために道が整備されたわけではないですが、車で訪問しやすくなったのは確かです（もっとも家々の近辺では車で行くのに苦勞することもあります）。現在長崎市では医師だけでなく多職種の協同により、たとえ寝たきりや終末期の方でも自宅で過ごせるケースがかなり増えています。御希望の方は当院地域連携室や地元のケアマネジャー等に相談してみてください。

内科 小出優史（平成 30 年 6 月）

準備中

内科 小片 守（平成 31 年 4 月）

初めまして、小片 守（おがたまもる）と申します。私は昭和 56 年度に長崎大学医学部を卒業し、同大学法医学教室の助手、講師として勤務した後、平成 2 年に鹿児島大学助教授に転任、平成 11 年から同大学教授（法医学）に昇任し、平成 31 年 3 月末で定年を迎えるまで勤務しました。翌 4 月 1 日から吉武孝敏理事長のご厚誼によって当院にお世話になっています。

現在、臨床の勉強をし直しつつ、内科や他科の先生方のご指導を仰ぎながら、主として介護保険適用型療養病床を担当しております。

鹿児島大学時代は、年間 150 体前後の法医解剖を行う傍ら、虐待が各臓器に及ぼす悪影響、頭部外傷における軸索・髄鞘損傷の証明、入浴中突然死の疫学的・法医病理学的検討などの研究を行うとともに、児童相談所相談員として児童虐待が疑われる小児の診察を行い、鹿児島こどもの虐待問題研究会の役員、鹿児島いのちの電話ボランティア養成講座の講師、鹿児島県警察協力医師会の顧問・研修会講師を務め、安全な入浴法の広報を行うなどの社会活動も行ってきました。

将来的には社会活動も再開したいと思っておりますが、現在のところはまず様々な疾患を有する主に高齢者の皆様やそのご家族に寄り添い、より幸せな生活を送れますように、微力ながら全力を尽くす所存です。皆々様にはご指導ご鞭撻のほど何卒宜しく願いいたします。

外科 山下昭彦（平成 31 年 4 月）

2019 年 4 月よりお世話になっております山下昭彦です。昭和 39 年 10 月 10 日東京オリンピックの開催日生まれ、長崎北陽台高校から長崎大学医学部に入学し、平成元年医師となりました。人生のほとんどを長崎で過ごしているため、長崎の街が大好きで、通勤の時間さえも長崎の風景を鑑賞する時間と考え、楽しんでいます。

前任は長崎百合野病院で 17 年間勤務いたしました。長崎記念病院にはまだ若かりし頃、一度だけ当直に来たことがあり、吐血の患者さんに対して緊急内視鏡を行なった強烈な印象があります。長崎百合野病院が長崎の北部医療圏の玄関口であるのと同様、長崎記念病院は南部医療圏の玄関口として同じような役割を担う立場であろうと理解しています。

令和時代の幕開けのこの時期に長崎記念病院に着任したことは何かしら運命的なものを感じます。非常に微力ながら、この病院の伝統を重んじつつ時代の流れに即した変革に順応し、スタッフと協力し合って地域医療に貢献できるように尽力したいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。